

村史こぼれ話 22

史料からみた観音寺久左衛門

教育委員会への問い合わせに観音寺久左衛門に関するものが時々あり、人々の関心の高さがうかがえます。久左衛門についてはいろいろな逸話も残されていますが、史料からはどんな久左衛門像がみえるでしょうか。村史編さんをお願いしている松永克男先生の史料から3回に分けてたどってみました。

(前編：久左衛門家の歴史)

観音寺久左衛門は幕末維新时期観音寺村を拠点とした博徒として有名である。姓は松宮で、家はもと麓村にあったようで、慶安3年(1650)の麓村の検地帳に記載がある。同じ麓村の出身で、のちに村山組おおじょうやの大庄屋になる河井吉兵衛家かわいきちべゑとは縁戚だったので、享保の頃(1716~36)から吉兵衛の計らいで、幕府・藩役人の宿泊所となるまでに成長し、金貸も行う富裕な農民として知られるようになった。延享年間(1744~48)になると、没落した走出村の庄屋の株を買い、麓村に住んだままで走出村庄屋になった。のち走出村に移住したが、観音寺村に隠居所として別宅を建てた。

以後、観音寺村の松宮家の当主は、代々久左衛門を名乗り、漆山村(旧巻町)の飴売り庄右衛門の弟子となり、飴売り家業を始めた。文化年間(1804~18)になると、飴売り渡世人の間の縄張り争いが激しくなり、また庄右衛門の支配力が弱まるにつれ、弟子の離反が相次いだ。久左衛門も文化6、7年(1809~10)の頃、庄右衛門から離れ、吉田村喜三郎・安兵衛の支配下に入った。やがて、久左衛門は飴売り仲間の強固な親方・弟子の関係を利用しながら博徒として勢力をもつようになり、石瀬代官所・出雲崎代官所めあかの目明しとなった。活動の中心を松岡村(旧吉田町)に移し、出雲崎にも仮宅をおいた。文化13年(1816)に、巻村と松岡新田の間の原で、漆山村祭礼の際の小競りこげ合いから、久左衛門の子分たちと、巻村長吉一家とが大げんかをしたが、吉田村茂吉と加茂町の目明し寅屋の仲裁で和解した。久左衛門のせがれ倅勇左衛門が子分らに命じて、麓村で博打ぼくちを行わせ、それを咎めた麓村庄屋らに手傷を負わせた件で、文政元年(1818)幕府の裁決があり、勇左衛門は死罪、子分たちには罰金が言い渡された。博徒集団は、武器を携行し、親分子分の関係によって強い結びつきをもっていたため、支配者にとって情報の収集や犯罪者の探索にきわめて有効で、観音寺村久左衛門は、出雲崎代官所の御用つとを務めながら、天保年間には博徒の親分としての勢力を回復した。

戊辰戦争と観音寺久左衛門—中編

話は幕末に移ってきます。嘉永3年(1850)になると、警察機構の手薄な三根山領(旗本牧野氏 6000石)では、久左衛門を郷中惣目明しごうちゆうそうめあかに依頼し、1年に金2両ずつ村々で負担することを決めている。さらに、文久2年(1862)久左衛門は与板領の目明し役に就任して手当をもらい、幕末には会津藩の越後進出とともに同藩とも深いつながりを持った。この幕末、久左衛門家では、父久左衛門は隠居の身で、当主は刑死した勇左衛門の弟の雄次郎であったと考えられる。(注: この人が後世有名になった観音寺久左衛門)

雄次郎は戊辰戦争に際しては、井田村庄屋五太夫、平野村庄屋祐之助、鮎穴村庄屋源兵衛らを協力者として、走出村庄屋龍太郎・観音寺村庄屋藤兵衛と語らい、会津藩など同盟軍側が勝利すれば、大名に取り立てられることを夢み、子分や農兵を率いて会津藩につき戦争に加わった。すぐ脇を北陸道(北国街道)が通る観音寺村は、会津藩の前線基地としての役割を果たし、雄次郎は専ら兵力の不足を補うための農兵の取立てにあたった。

3月末には博徒兵・会津浪人・会津藩正規の兵など、約200人が観音寺村雄次郎宅に駐屯した。慶応4年(1868)閏4月、戊辰戦争が激化すると、雄次郎の博徒兵は会津諸隊とともに片貝・妙法寺の戦いに加わり、5月6日には猿ヶ馬場峠を固めた。10日頃、水戸浪人と野積辺の戦争に加わり、16日には会津・水戸浪人とともに猿ヶ馬場で新政府軍と戦った。24日には、寺泊沖に新政軍の軍艦が現れて寺泊へ向って大砲を撃ちかけ、山田村の新政府軍も押し出し、庄内・会津・雄次郎の手のものと戦争になり、同盟軍側が700人余の即死・負傷者を出し敗退した。26日頃、庄内藩・村上藩などの同盟軍が大挙して、新政府軍に従う与板へ攻め入る情報が入り、与板藩は防備を嚴重にしたが、藩に残った兵は少なく、5月29日大挙し侵入した同盟軍によって城は焼かれ町は大混乱となった。翌29日は新政府軍の諸藩兵が与板に集合して防戦を張り、戦いは60日余におよんだ。この同盟軍による与板侵攻の際、同盟軍の中に雄次郎の手勢がいて、「商家を選ばず財貨・衣服を略奪し、乱暴狼藉」を働いたと新政府側の記録にある。